

英 語 科

天野 紳一・松村 健・赤松 猛

I 研究の経緯

1 昨年度までの研究

昨年度の実践は、文法や語彙の理解に焦点を当てた指導とフォニックスを活用した音声指導に分けることができる。それぞれの指導内容は表1の通りである。

表1 昨年度の指導内容（概要）

Ⅱ期前期	Ⅱ期後期	Ⅲ期
・英語表現の繰り返し練習 【聞く・話す】 ・歌の歌詞や辞書を用いながら会話につなげる指導【話す・読む】	・英語表現の繰り返し練習 【聞く・話す】 ・英語表現の構造や機能の理解に関する指導 【読む】	・英語表現の繰り返し練習 【聞く・話す】 ・状況に応じた表現の選択を促す指導 【話す・書く】 ・状況をとらえた文章の適切な理解に関する指導 【読む】
・フォニックスでアルファベット1～3文字程度の指導 【読む】	・フォニックスでの音の足し算の指導 【読む・書く】	・Rhyming（韻）の要素を取り入れたフォニックスでの音声指導 【読む・書く】

※Ⅱ期後期では、「状況に応じた表現の選択」や「状況を捉えた文章の適切な理解」を促す活動を全く行わないということではなく、教師からの発問、説明や助言の量がⅢ期と比べて多いことを示す。

指導実践から明らかになったことを以下に示す。

(1) 文法や語彙の理解に焦点を当てた指導（道案内）

①Ⅱ期前期（小学6年生）

- ・Go ~block(s). , Turn left/right. , You can see it on your left/right.といった道案内で使用される表現を繰り返し音読練習するだけでなく、行動を伴った場面を設定した練習を通して、一定の表現の定着が見受けられた。その一方で、ただ表現を音読しているような様子もあり、つなぎ言葉やあいづちなど状況や場面に応じたコミュニケーションの定着については十分ではなかった。

②Ⅱ期後期（中学1年生）

- ・道案内で使用される表現については、定着が見受けられたが、英語表現の構造や機能の理解に関する指導という視点で考えると、題材として取り上げた can と may の使い分けが十分ではなかった。インテイクの段階で適切な文法や語法を取捨選択できるように、場面設定や状況をとらえる発問等の充実が必要である。

③Ⅲ期（中学2年生）

- ・命令文と助動詞 should の使用については、道案内の場面においては適切に使用できていたが、道案内ではない場面になると、そうではなかった。道案内以外の場面でも適切に使用できるように、明示的な教授をしていく必要がある。

(2) フォニックスを活用した音声指導

①Ⅱ期前期（小学6年生）

- ・1～3文字の英語や magic-e (a-e,i-e,o-e), -old, ch については、フォニックステストで70%の正答率で、継続した指導の成果が見られた。magic-e (u-e), u, sh については、正答率が低いので、課

題といえる。ALT による Zoo Phonics とアルファベット（文字）のつながりが弱いと感じる場面も授業においては見受けられるので、Zoo Phonics と文字を提示したフォニックス指導や繰り返し練習させていく必要がある。

②Ⅱ期後期（中学1年生）

- ・年度末のフォニックステストにおいて、生徒全体の正答率が70%を越え、継続した指導の成果が見受けられた。しかし、air, oo, th, ow などについては、ローマ字読みになってしまう傾向があった。東雲小学校出身者とその他の小学校出身者では、ck, ch, sh について、東雲小学校出身者の正答率が上回っており、小中連携の成果であるといえる。

③Ⅲ期（中学2年生）

- ・年度末に行った音読テストにおいて、各単語をどの程度正確に読むことができるかを調べた。例えば、文章中に含まれる未習語のうち magic-e を規則として適用すれば読める2語のうち、1語については92%の生徒が正しく読み、もう1つの語は77%の生徒が正しく読めた。本当に完全な未知語であるか否かは確認できないが、自然な文脈において、かなり高い割合で正しく読むことができている。

以上のように、フォニックス指導においては、一定の成果が見られており、今年度も継続して指導していこうと考える。しかし、文法や語彙の理解に焦点を当てた指導においては、道案内の表現や決まり文句といったものの定着については、ある程度の成果が得られたものの、言語の使用場面におけるコミュニケーションの取り方や言語の働きを考えたアウトプットまで高められていない。原因として、コミュニケーションの基本原則であるコミュニケーションの目的、双方向性（インプット、アウトプット）、自己内における対話（インテイク）のそれぞれの段階での指導が焦点化されておらず、場当たり的な指導になっていることが考えられる。そこで、学びのつながりを「状況や言語の働きに着目させる発問」に焦点を当てることとした。

2 今年度の研究

（1）発問に関する指導

今年度は、小中5年間のつながりを意識して、授業における発問に着目し、発問を通して、対話がなされている場面や状況、言語の意味やニュアンスに対する理解を深めることができるかを検証する。

Ⅱ期前期においては、主に対話がなされている場面や状況をとらえる発問を取り上げ、児童がどの程度まで場面や状況をとらえられるのかどうかを探りたい。Ⅱ期後期においては、場面や状況をとらえる発問に加え、言語のニュアンスに関する発問も取り上げる。そうすることで、場面や状況でなぜその言語が使用されているのか、使用されている言語に着目することで場面や状況がもっととらえられるのではないかと考えている。Ⅲ期においては、言語の働きという視点から、言語が持つ意味やニュアンスにより、対話している人の人間関係などの背景を捉えるような発問を取り上げる。

表2 状況や言語の働きに着目させる発問の指導における到達目標

期	Stage	到達目標
Ⅱ前	Stage 1	・対話している人数、状況等を理解することができる。
Ⅱ後	Stage 2	・対話している人数、状況、場面を理解することができる。 ・対話している人が使用する言語に関する発問を通して、言語の意味やニュアンスをとらえることができる。

III	Stage 3	<ul style="list-style-type: none"> ・対話している人数，状況，場面を理解することができる。 ・対話している人が使用する言語に関する発問を通して，言語の意味やニュアンスだけでなく，対話している人の人間関係などの背景をとらえることができる。
-----	---------	---

(2) フォニックスを活用した音声指導

フォニックス指導については，系統的・継続的な指導が必要であると考え。そこで，各段階における指導内容と到達目標を次のように作成した。

表3 フォニックス指導における指導内容と到達目標

期	Stage	到達目標（【 】は指導内容，〈 〉は指導方法）
II 前	Stage 1 (小学5年)	【アルファベットの各文字の指導】 <ul style="list-style-type: none"> ・アルファベットの名前と音を理解することができる。 ・アルファベットの各文字の音を発音することができる。
	Stage 2 (小学6年)	〈Zoo Phonics, チャンツ等を用いた発音指導〉 【アルファベット2～3文字の指導】 <ul style="list-style-type: none"> ・アルファベットの各文字の足し算を理解することができる。 ・アルファベット2～3文字程度の単語を読むことができる。 〈Zoo Phonics, チャンツ等を用いた発音指導, 文字を提示する発音指導〉
II 後	Stage 3 (中学1年)	【4文字以上の音の足し算の指導】 <ul style="list-style-type: none"> ・特徴的な文字のつながりやマジック e などを含む英単語を読むことができる。 〈同じフォニックスを取り上げた繰り返し音読指導, ビンゴシートを用いた音読筆写〉
III	Stage 4 (中学2年)	【Rhyming の要素を取り入れた英文での指導】 <ul style="list-style-type: none"> ・文章読解において，英単語の音声を予想して発音することができる。 〈ビンゴシートを用いた音読筆写, Rhyming (韻) の要素を取り入れたフォニックス指導〉
	Stage 5 (中学3年)	【Rhyming (韻) の要素を取り入れた英文での指導】 <ul style="list-style-type: none"> ・文章読解において，新出語の音声を予想して発音することができる。 〈Rhyming (韻) の要素を取り入れたフォニックス指導〉

II期においては，文字レベルから単語レベルへ移行していく。II期前期においては Zoo Phonics を取り入れながら発音指導を実施する。II期後期においては，発音指導から音読筆写へ移行しながら，文字と音のつながりにより着目できるように工夫する。III期においては，Rhyming (韻) の要素を取り入れた英文の音読練習を繰り返し実施する。magic-e を取り上げた英文を紹介する。

Thank for your nice advice, I could arrive at the nice bike shop near the fine shrine.

As you know, I like to ride a white bike. Lice like to ride rice, though.

I have pride in the bike ride when I ride a white bike.

このように，英文の中で同じフォニックスを取り入れることで，音に気づかせていく。そしてIII期の Stage5 では，英文の中で綴りは違うが同音となるフォニックスを取り入れることで，さらに発展的に指導していく。/ ə: /の発音となるフォニックスを取り上げた英文を紹介する。

The first person turned the paper over for the purpose of writing her opinion on it. The second person got the paper from her to learn from what she wrote on the paper. The second person gave the paper to the third person for the purpose of writing her opinion, but she didn't work at all. She just burned the paper using her lighter.

3 中学校卒業時のめざす生徒像に向けた授業仮説

本校英語科が設定する中学校卒業時のめざす生徒像は、初歩的な英語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができ、英語に関する知識・技能が深まっており、4技能（話すこと・聞くこと・読むこと・書くこと）を駆使して、状況や相手に応じて適切に英語を使うことができる生徒である。積極的にコミュニケーションを図ることができるとは、外国の文化や他者と英語でのコミュニケーションを積極的に行う態度があることを指す。

Ⅱ期前期（小学校5，6年生） 〈ことばに関する知識への気づきを促す指導〉

Ⅱ期前期では音声面を中心とした表現（会話）練習を継続して行いながら、母語と外国語の比較、具体的には発音の違い、状況に応じた表現の違いなどの「ことばへの気づき」を促す指導を行う。音声面では例外のないアルファベット1～3文字程度のフォニックス指導（cvc, blend, magic-e など）を中心とし、ことばに関する知識に気づかせる指導を入れていく必要があると考えている。具体的には5年生で Zoo phonics によるジェスチャーと文字・音のつながりの指導やチャンツを利用した発音練習の繰り返し指導をする。そして5年生から継続して Zoo phonics によるアルファベット各文字の指導と b+a+t=bat のように各アルファベットの音を足してできる音声を把握できる指導をする。文法に関する学習は中学校に入ってからとなるが、小学校ではフォニックス指導においてことばに関する知識を学習する活動、発問を通して対話がされている状況等をとらえる活動を取り入れる。合わせて、コミュニケーションの場面である視点にたち、言語だけでなく非言語のコミュニケーションも日常的に取り入れていく。このような指導を行うことにより、経験・体験と理解をつないだり、言語の使用場面をとらえたりする学習をさせることができるのではないかと考える。

Ⅱ期後期（中学校1年生） 〈ことばに関する知識への理解を促す指導〉

Ⅱ期後期においてことばに関する知識を理解するとは、小学校で気づいたことばに関する知識を自分で見つけたり説明したり、また状況に応じた表現などをその知識を用いて理解することである。具体的な指導に関しては、フォニックス指導をさらに充実させ、長い単語でも音の足し算を自分でできるように指導する。また、不規則な発音についても学習することで、読むことや書くことへの「足場づくり」になると考えている。フォニックス指導を充実させることにより、読むことはもちろんのこと書くことに関する意欲にも関係するのではないかと考える。また単語を書く際には、音読筆写の手法を取り入れることにより、生徒が認識している音と文字とをスムーズに一致させることができるようにする。そして発問に関する指導では、言語の使用場面や対話の状況等をとらえられるような指導をする。その際、状況に応じてどのような英語表現を使えばいいのかを考えさせる活動を取り入れる。言語の使用場面や言語の意味やニュアンスを的確にとらえ、自分の言葉で説明できるようになるための指導が、Ⅲ期での文法学習に関する「足場づくり」になると考えている。これらの活動を繰り返し行うことにより、小学校段階において体系的に理解できなかった英語表現の文法に関する知識が整理され、英語をわかって使えるようになる基盤となるのではないかと考える。

Ⅲ期（中学校2，3年生） 〈ことばに関する知識を理解し状況の中で使う時期〉

Ⅲ期では、生徒自身が獲得している英語に関する知識を文脈の中で適切に活用することをめざしている。英語科における「生活知」とは、日常的に話したり書いたりして使用している英語表現の知識であり、「科学知」とは学校で学習する言語の機能に関する知識のことと捉える。ことばに関する知識を獲得させる指導（発音や文法など）を行うことにより、数多くある英語表現の中から、どの場面でどの表現を使うことが適切なのかを考えさせることができる。Ⅲ期では、発問を通して実際の場面とそこで使われる英語表現との関連を特に意識して、生徒に表現と場面・状況の関連性に気づかせ、その考えを基に適切に英語表現を活用する（話す・書く）ことができるような指導を行う。英語表現を文脈の中で分析的に見ることを通して、状況や場面に応じた適切な表現を学習し、そして練習することが日常使用している英語知識（生活知）と英語の機能に関する知識（科学知）の「のぼりおり」につながるのではないかと考える。

かと考えている。また、音声指導においては、韻の要素を取り入れたフォニックス学習材を活用して、英単語1語のフォニックスに焦点を当てる指導から、英文の中から、共通のフォニックス（文字のつながり、同様の音）を見つけ出し、音読練習を繰り返し、文字への気づきを促す指導をする。

Ⅱ 本年度の研究計画

1 研究の目的

対話の場面や状況をとらえる発問を通して、小・中学校の学びのつながる授業のあり方を探る。

2 研究の方法

- (1) 発問に関する指導においては、各学年の到達目標（表2）と授業仮説を設定する。
- (2) フォニックスを活用した音声指導において、Ⅱ期とⅢ期における到達目標（表3）と系統的な指導方法を昨年度作成したモデルに沿って指導し、音声指導のあり方を模索する。
- (3) 以下の授業を実施し、(1)について授業仮説を検証する。

①Ⅱ期前期（小学校5，6年生）

【授業仮説】

- ・対話をしている場面に関する発問を通して、その状況等をとらえられるのではないだろうか。
- ・対話をしている場面に関する発問を通して、使用されていることばへの気づきを促せるのではないだろうか。

②Ⅱ期後期（中学校1年生）

【授業仮説】

- ・対話をしている場面に関する発問を通して、その状況等をとらえられるのではないだろうか。
- ・対話している人が使用する言語に関する発問を通して、言語の意味やニュアンスを理解することができるのではないだろうか。

③Ⅲ期（中学校2，3年生）

【授業仮説】

- ・対話をしている場面に関する発問を通して、その状況等をとらえられるのではないだろうか。
- ・対話している人が使用する言語に関する発問を通して、言語の意味やニュアンスだけでなく、対話している人間の人間関係などを理解することができるのではないだろうか。

④検証方法

- ・授業で使用したワークシートを、ループリックを用いて検証する。